つれづれぐさ

第14号

南山大学国語学国文学会報　第14号
昭和六一年一一月三日発行
発行者　南山大学国語学国文学会
（名古屋市昭和区山里町一八　南山大学内）
発行責任者　山本和義

リチャード・レイン氏所蔵 近世文芸作品コレクションの購入

安田文吉

今から三年前の秋、図書館長の宮川茂夫先生からリチャード・レイン氏に会うのでいっしょに行ってくれないかとお話しがあった。レイン氏といえば日本文化、特に浮世絵の研究については一家をなしておられ、つとに名を知られた人で、私も以前から一度会ってみたいと思っていたので、驚きも一入であった。宮川先生の話によると氏はコレクションの一部を南山大学に譲りたい（有償で）とのことであった。レイン氏がコレクションの処分をはじめておられることは、その前年の東京古典会の入札会にもその一部が出品されており知ってはいたのだが、稀本、珍本が多くとても我々の手のとどくような価格ではなかったので、「よそに思うた念ばかり」（閑吟集十五番）で溜息をつくしかなかった。それが急に身近なものになった。今回はレイン氏がリスト・アップされた四〇〇～五〇〇点の中から現物をみて、適当に選んでほしいとのこと我々研究者にとって貴重な原本を手にとって見ることができるのはいつでもこの上もない幸である。しかし、選ぶとなると自分一人では荷が重すぎるので、美濃部先生にも御一緒願い、二人で選別することにした。木枯しの吹く十二月初旬、宮川先生と名神をひた走り約束の東急インで待つことしばし、レイン氏が古びたマーク▮（初期の型）のバンでやってこられた。後部には、今日見せようとする蔵書でいっぱいであった。挨拶もそこそこに美濃部先生と私は、少しの間も惜しいと、次から次へとコレクションの書物をひもとき、見ていった。それらの中には、原本、最善本珍本、稀本が多く、その素晴らしさに、狂喜の思いで、腹の減るのもすっかり忘れ、全部見終った時は、とうに午後七時をすぎていた。三時頃からみたのであったから、実に四時間以上見続けたわけである。それだけ長時間、真剣に多量の本を見たことは、かつて余りなかった。見終って、目は疲れてショボショボするやら、肩がこるやらであったが、実に充実した時間だった。

その調査結果にもとづき選んだのは、金額の都合もあり、全部で一一三点である。その概要は、本学図書館紀要の三号に述べてあるが、今一度簡潔に紹介しよう。

黒本　二〇点
青本　一三点
黒本・青本の判別がつかないもの　一点
丹緑本　二点
絵本　六点
仮名草子　三点
浮世草子　二点
芝居絵番付　三六点
富本・長唄正本稽古本　二九点
その他　一点

丹緑本の二点（義経記、曽我物語）を除き、

すべて近世文芸作品である。

これら近世文芸作品コレクションの特色の第一は、黒本、青本等近世絵本のコレクションとしてまとまっているという点である。特色の第二はゴンクウル、ブルティ、ジャバルといった外国の日本研究者の旧蔵になるものが多いという点である。第三は黒本、青本等に「国書総目録」にも見られない「熊坂誕生話」「恵方旅人揃」などといった未知のものがあることや、「世間娘気質」の最善本、「青楼年中行事」の黒刷本といった珍本、稀本が多数ある点である。これらのコレクションは文部省の助成金を含めて、約一〇〇〇万円で本学図書館に購入された。これだけの金額であるならば他に購入すべき本があるのではないかとの議論もあったが、国文学研究にとって最も基礎となる原典の収集はいくら我々が購入したいと思っても、提供してくれる人や物がなければ何ともいたし方のないことであり、最優先されるべきである。今回は大学にとっても、我々研究学徒にとっても千載一遇のチャンスであった。特に本学には日本文化、日本文学研究の基礎たる原典資料が非常に不足していたので、この購入は干天の慈雨とも言える出来事と言ってよい。今後はこれらの資料を大いに利用して研究成果を上げることが我々に課せられた課題であろう。